留学レポート

馬場　元暉

　このたび、埼玉親善大使としてクイーンズランド州に滞在させていただきました、馬場元暉と申します。現地での経験を通して、学んだことや感じたことなどを（1）Yeppoon での暮らし（2）歴史と文化（３）日本との繋がり　の３項目に分けて紹介します。

（１）Yeppoon での暮らし

Yeppoon は、Rockhampton という都市の東４０ｋｍにある、リゾートタウンです。Rockhampton までは、東京（成田）から乗り継ぎも含めておよそ１０時間ほどです。海が凄くきれいでした。海岸に沿ってホテルが連なっていました。休日になるとそれらのホテルは満室になっていました。ホテルの他にもカフェなどのショップがたくさんありました。週末には私も実際にサーフィンやセーリングをしました。人生で初めてのサーフィン、セーリングでしたが、インストラクターが丁寧に指導してくれたので楽しくできました。再び Yeppoon に行く機会があったらもう一度サーフィンやセーリングをしたいと思います。サーフィンとセーリングでは、ドイツ、イタリアなどからの交換留学生と一緒にしたので彼らとも交流する機会がありました。週末ではサーフィンやセーリングの他にホームステイファミリーと一緒に、クーベリーパークという動物園に行きました。そこではコアラ、カンガルー、エミュなどの多くの動物を見ることが出来ます。右の写真のように実際に動物に餌を与えることもできます。中には、ヒクイドリ（cassowary）という地球で最も危険な鳥もいました。現代の恐竜と呼ばれるほど強靭な身体の持ち主で、たくましい脚がとても印象的でした。元々はクイーンズランド州の森林に分布していましたが、人間がパンなどの食料を与えるようになってから人間の生活の場にも表れるようになり、最悪の場合、人が殺されるということが起こってしまうとも聞きました。ただ近年の森林面積減少により、個体数が著しく減っており、絶滅の危機があるとして動物園などで保護されるようになりました。平日の放課後にはホストブラザーと映画やコメディを観たりしました。

Yeppoon State High School について

　平日には、上記の高校に通学しました。先生も生徒も優しく対応してくれたので、特に

問題はありませんでした。たくさんの人と他愛のないことを話すことができました。実際に授業に参加した中で特に印象に残っているのは、英語（国語），音楽，メディアの３つの授業です。

・英語の授業では、生徒は小説を書いていました。まず１０人の男女の写真がスクリーンに映し出され、各々の生徒は、自分の小説の主人公にしたい人物をその写真の中から決定します。その後、喜劇、悲劇などの方向性を決めて、クライマックスを考えていました。私の学校では小説を書くという授業は全くないので、新鮮でした。

・音楽では、生徒がエッセイを書いていました。ピアノの細かな表現技法が曲全体にどのような印象を与えるのか、といったことがエッセイに盛り込まれていました。歌詞の意味を考慮に入れながらの討論もありました。その討論ですが、一つ紛らわしい英単語に遭遇しました。それは、timbre という単語です。音色や音質などを意味するこの単語を、私は最初、timber（樹木）と勘違いしていました。幸いにも、バディが教えてくれたお陰で、討論の内容を理解することが出来ました。少なくとも私は、日本の音楽の授業でエッセイを書くことはまったくなかったので感心しました。AI の発達などこれから社会が複雑になっていくにつれて、自分の意見を論理的に表現することが、ますます重要になっています。この観点からすると、オーストラリアを含む諸外国の教育が、日本の教育よりも一歩二歩先に進んでいるように見えました。

・メディアでは、写真や映像のことについて学ぶ授業です。写真の表現がどのように人の心に影響を与えるのかなど、メディアと人間との関連性なども扱っています。私が出席した授業では、学校内の不気味なものを写真に収めるという課題で、私のグループでは、建物の落書きに着眼しました。落書きが多くて少し驚いたのですが、不気味で奇妙な写真を撮ることが出来ました。言語の壁があっても、写真の効果や、写真が表していることなどを理解することが出来ました。

ここで挙げた３つの授業の他にも生徒の独創性や表現能力を高める授業が沢山ありました。授業の工夫として、TED の動画や、学術的な動画を参考にしていました。確かに教科書の内容を忠実に勉強していくことは大事ですが、それらの動画を活用することによって多方面から物事を捉えることや、異なった考え方、アプローチなども取り入れることが出来るので、大変良いと思いました。

(2) 歴史と伝統

オーストラリアの歴史を理解するうえで、知っておかなければならないことは、ANZAC Day という日です。ANZAC は、Australia and New Zealand Army Corps（豪州ＮＺ

連合軍)の略称です。1914 年 4 月 25 日の第一次世界大戦におけるトルコのガリポリの戦いで勇敢に戦った ANZAC の兵士たちを追悼します。この作戦では多数の犠牲者を出してしまい、作戦は失敗しましたが、この悲劇はオーストラリアのアイデンティティ形成に重要な基盤を与えることとなりました。1920 年代中頃に祝日として各州に広まり、のちに第二次世界大戦などの他の戦争による戦没者慰霊の役割も兼ねるようになりました。ANZAC Day ではオーストラリアの各地で行進、花輪の贈呈、演説などが行われ、重要な祝日です。
オーストラリアの国歌や、waltzing matilda, last post などといった曲が演奏されます。私も YouTube でそれらの曲を聴いてみたのですが、厳かな曲調でした。

現地の学校の友達やホームステイ先のお母さんとお父さんなどは、ANZAC Day にほぼ全ての店が開いておらず、前もって買い物を済ませておかなければならないので少し大変だとも言っていました。右の写真は Emu Park という公園で撮影した写真です。この公園では、ANZAC にまつわる展示がありました。オーストラリアが経験した、すべての戦争についての紹介がありました。

左の写真はロックハンプトンの植物園で撮れた写真です。第一次、第二次世界大戦や、朝鮮戦争やベトナム戦争，マラヤ危機なども含むすべての戦争で命を落とした兵士のための記念碑です。すごく神聖な場所でした。写真には写っていませんが大勢の人が訪れていました。

次に先住民族、アボリジニのことです。私は、エアーズロックの正式名称は Uluru（ウルル）だという事実をオーストラリアに来て初めて知りました。この場所は、現地のアボリジニにとって神聖な場所であり、岩の上を歩くことは、アボリジニのしきたりや文化、法を侵害します。しかしながら、岩の上を歩く観光客が後を絶えません。旅行、観光雑誌がその情報を省いているので、ほとんどの観光客が

このことを知らずに、岩の上を歩いてしまうという事態が起こってしまっています。観光がもたらすお金が絡んでくるので、旅行会社はそのことを伝えていないのです。このことを聞いて、少し悲しくなったと同時に、もっとたくさんの人にこのことを知ってもらいたいと思いました。オーストラリアは多文化共生の社会で、多様性や様々な価値観を認めながら進化していますが、それと同時に、固有の文化や伝統を守り続けてほしいと考えております。

（３）日本との繋がり

日本との繋がりの中で最も顕著な例は、日本車です。これはオーストラリアだけではなくどの諸外国でもそうなのですが、至る所に日本車の販売店がありました。また、日本食も大人気で，寿司の店を何軒も見つけました。日本車、日本食の普及は今更言うまでもありません。

オーストラリアでは日本語教育が活発で、私が通った Yeppoon 高校にも日本語の授業をとっている生徒が多く見受けられました。日本語の授業でパワーポイントを使いながら埼玉のことを紹介しました。東京五輪・パラリンピックのバッジや、今年のラグビーワールドカップのバッジを渡すとみんな喜んでくれました。両方とも埼玉が開催地となっているので、たくさんの海外の方に埼玉へ足を運んでもらいたいです。

日本語の授業では漢字の書き方や助詞の使い方などに苦戦している様子でした。友達に、日本語の授業を選択した理由を尋ねてみたところ、ほとんどが日本で英語の先生になりたいとのことでした。Yeppoon 高校の姉妹校である、埼玉県立和光国際高校や、STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics 科学、技術、工学、数学)の関係で、日本に交換留学したことのある生徒もいました。

写真は、ロックハンプトンの植物園にあった日本庭園で、日豪友好の証となっています。

～終わりに～

今回、すごく貴重な経験をすることができ、この 2 週間は絶対に忘れられない思い出となりました。毎日が新しいことの発見で、刺激的でした。現地の方の英語は凄く速くて追いつけない時もありましたが、聞き取れた部分だけども拾って、何とか会話を成立させることが出来ました。しかし、もう少し深い内容まで話すには、もっと英語の勉強をする必要があることを痛感しました。これからも速い

英語を理解し、上手に話すようになるため、英語の勉強を頑張ろうと決心しました。また、たとえ、話す言語が異なっているとしても、互いに共有したり、意味を理解することのできることがあるということを改めて認識しました。その一つが、音楽です。私は小学生の頃から今もピアノを弾いています。放課後には、高校のコンサートバンドに参加したり、僕が好きなクラシックについて友達や家族と話したりしました。言語が違っていても、楽譜を読むことはできます。そういった意味で音楽は、人々の心を通わせることが出来るものだと、思いました。

音楽の他に、この滞在で強く感じたことは、『外国語、異文化を学ぶことは、母語そして自分の国の文化を学ぶことに繋がる』ということです。外国語を学ぶ意義として、言語を客観的にとらえることが出来るということが挙げられます。母語だけを話していたら、母語の持つ特徴や、特異性などをなかなか感じづらいです。他言語を学んで初めて、母語を客観的に見ることが出来ます。滞在中に、日本語なら考えがまとまっているけど、英語での相応表現が見つからないということが多々ありました。ネットで調べても納得のいく訳がありませんでした。これは文化の違いから由来するもので、外国語を学んでいないとこのような苦悩に遭遇することはありません。故に自分の母語、自分の国の文化を理解して初めて、外国語を習得できるのではないでしょうか。今日グローバリズムの風潮の高まりにつれて、英語の重要度が増してきています。だからこそ、自分の国の言語や文化を知る必要があると思います。私の母語である日本語や、日本の文化を大事にしながら、世界の人々と共に渡り歩んでいきたいと思います。

最後に、県の国際課の方々、ホームステイファミリー、現地の高校での先生や生徒、一緒に行った 2 人の生徒、両親、クイーンズランドの政府担当者の方々、このプロジェクトで会った全ての人に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。